

回想

戦後 70 年の節目に思う世界銀行入行の頃

菊地邦夫

シニアアドバイザー

Washington Research & Analysis, LLC

私がアメリカに来たのは 1960 年の 9 月で、その頃は日本とアメリカはすべての意味で遠かった。貧乏学生だったので、電話は無理、国際電話が繋がるとしても 3 分間約 15 ドルで私のひと月の生活費の 3 分の 1 でした。ラジオもテレビも寮の部屋には無く、日本の情報源は家族からの手紙ぐらいでした。今やワシントン DC にいても日本のことがよくわかります。テレビ (NHK ワールド)、インターネット、スカイプなどで 2 国間の Communication に関する時差と経費はほとんど零です。驚くべきことはこれが日本とアメリカだけのことでなく、例外はありますが情報は瞬時に世界を網羅しています。

今年は日本にとって戦後 70 年なので日本のテレビ番組はそのころのことでいっぱいです。4 月頃からは悲惨な沖縄戦の映像が多くありました。最近の NHK では東京大空襲や、そのほかの大都市に対するアメリカの無差別爆撃の状況などが以前にもまして多いようです。8 月 15 日の玉音放送まで続くでしょう。3 歳だった私は父の仕事があった静岡県の沼津市にいましたが、母たちが、「やっと終戦だ」と繰り返し話しているのしか覚えていません。その後、アメリカ占領下の日本は大変でした。あたかも日本全土が被災地で、インフラは崩壊し、雇用はなく、その上に海外から何百万という元軍人と中国、朝鮮半島からの帰国者が着のみ着のまま帰国したのです。

私はここ数年来、新潟 (浦佐) の国際大学で Project Financing の講義をしていますが、開発途上国から来た留学生たちに初めに、1940 年代後半の日本は今では想像もつかないくらいに最貧国だったと、自分の体験も交えて教えます。それからどうやって、19 年後には東京オリンピックを開催できるような国になれたのかを、インフラ整備の為の Project Financing という観点から説明します。国の発展に必要な大型インフラ事業、例えば、鉄道、道路、電力、水資源開発などには膨大な資金が必要で、外貨資金は国外からの調達に頼ります。そこで重要なのが、Project Financing 手法と世銀などの国際金融機関の役割です。

私の書斎の本棚には約 30 冊の大型の Three Hole Binder があります。中身は私が 30 年間在籍した世界銀行「以後、「世銀」という」時代の Chronological File です。今日はその中から世銀入行時代、1970 年の書類を紐解きます。今想えば、そのころの私はすでにアメリカ生活 10 年目、それ以前も 12 年間セントジョセフカレッジという横浜にあった英語で教えるミッションスクールに通ったので、何とも変な日本人でした。私をご存じの SRID の先輩諸兄には「やっと今頃自覚したか」と笑われそうです。

さて前置きが長くなりましたが、私は1969年9月の世銀 Young Professional（以後、「YP」という）選考で世銀就職が決まりました。仲間は15名でした。そのころの世銀は相対的に世界一の開発機関でした。ベトナム戦争と冷戦のさなかとはいえ、アメリカは、圧倒的な財力と武力をもち、西洋諸国の盟主でした。そのアメリカが筆頭株主の開発援助機関が、White House から歩いて5分のところに本拠を構えていました。1968年に総裁に就任した元国防長官の Robert McNamara 氏は世銀を拡大路線に乗せ、組織全体がやる気十分、元気いっぱいでした。とはいえ、現在と比べれば規模はまだ小さく、職員数は3000人未満（現在は1万人以上）で、総裁は毎年、近くのホテル借り切りのクリスマスパーティーでは参加した職員とその同伴者一人一人と握手をしていました。

そのようなエリート組織の狭き門のYPに私のような30歳未満の日本人が選ばれたのは運とTimingが良かったからです。日本がその3年前に借り入れ国から卒業して、貸出国になったにも関わらず、日本人職員が少なかったことと、その前年に世銀に新しく都市開発課（Urban Projects Division）ができて、私の都市計画修士学位と3年間の都市交通コンサルタント職歴が評価されたからです。9月に採用が決まった後、約2か月の世界一周旅行と日本の家族と正月を過ごした後、1970年1月に最初の（YPは1年の試用期間を半年ずつ）部署、中南米局ブラジル担当課に配属されました。

その当時、世銀はブラジルに対する大型融資を急速に増やしていました。水力発電、製鉄所（かの有名なウジミナス製鉄所）など。課長は新進気鋭、頭脳明晰の若いパキスタン人でした。彼にあいさつをすると「君は交通問題の専門家として、現在準備をしている、サンパウロの環状高速道路プロジェクトの調査に参加すると良い。2週間後に調査団が現地に行くから参加するように。」「課長、再来週はカーニバルですが。」「構わん、ブラジルを体験するにはまたとない機会だ、行きたまえ。」ちなみに世銀では出張のことをMissionと呼ぶ。あたかも現地人を改宗する宗教団体の伝道のように。

かくて私の最初の世銀Missionはリオのカーニバルの最中でした。金曜日の晩にJFK空港からその当時のパンアメ航空のファーストクラスに乗り込み、土曜日の朝にサンバでお祭り騒ぎのコパカバーナ・パラスホテルに到着しました。それから4日間は連日連夜、カーニバルに没頭しました。遅くまで寝て、コパカバーナの海で泳ぎ、夜は大舞踏会、サンバスクールの見物、などなど。特に感動したのは火曜日のサンバの女王、Elizete Cardoso（エリゼッチ・カルドーゾ）のコンサートでした。カーニバルは「灰の水曜日」に終わり、リオの全市民が一日中ぼんやりと過ごしていました。木曜日から仕事で世銀事務所に行くと、都市開発課の課長が「菊地、どこにいたのだ、サンパウロで君を待っていたぞ。」「それは失礼しました、しかし、リオのカーニバルは素晴らしかったです。」「そうか、それはよかった。」と真におおらかなフランス人でした。その日から仕事をはじめ、週明けにはサンパウロに行き、市長、高速道路公団総裁などと課長に付き添って環状道路プロジェクトに対する融資の促進を検討しました。

残念ながら、すでに2年も経過して数多くの専門家（コンサルタント会社）の審査を繰り返したにもかかわらず、世銀の担当技官はさらなる調査を要求したのでサンパウロ州政府は非常に不満でした。後でわかったことですが、その技官はもともとアメリカの交通コンサルタント会社のOBで、融資の決断をする代わりに延々と調査をするのが得意な人でした。2年後にはサンパウロ市長が融資を決められない世銀のMissionを断ったそうです。話がそれましたが、結局カーニバルの後、ブラジルでは正味5日間仕事をして2週間後に本部に戻りました。

4月には世銀のブラジル経済Missionの一員として1ヶ月間ブラジルに滞在しました。私は「ブラジルの保健と社会保障」について調査をしました。真面目に考えれば気の遠くなるような役目でしたが、ひと月のあいだにブラジル国内を飛び回って主要州政府からデータを集め、ワシントンに戻って50ページのWorking Paperにまとめました。7月には経済Missionの中間報告のためにブラジルに戻り、自分のペーパーに手を加えた後にブラジル課でのYP試用期間を終えました。

次の配属は、特別事業部の都市開発課でした。まず東アフリカ共同体のアルーシャ新首都住宅投資案件の書類審査に没頭していましたが、急に局長補佐官に抜擢されて、11月にはその当時の（Bangladesh 立国前の）東パキスタン課の農業融資案件のSupervision Missionに参加することになりました。またまたファーストクラス便に搭乗してロンドン・カラチ経由でダッカに飛びました。ホテルはインターコンチでしたが、土地の食事になれようとカレーを食べていたら、一週間でのどが腫れたのであわててホテルのハンバーガーの世話になりました。ホテルの食事で有名だったのはHilsaというボラののような魚をもみ殻の煙で燻製にした、Rice Husk Smoked Hilsaのサンドイッチでしたが、これは記憶に残る逸品でした。

先輩技官と一緒に建設中の灌漑施設を見て回る楽な仕事だと内心のんびりしていました。10日目の午後、インド国境のガンジス川にかかったHarding橋の上から川の水量を測るのを見学してダッカに戻るために飛行場に行くとCyclone（台風）が急にベンガル湾を北上してきたのでその晩の便はすべてキャンセルでした。あくる土曜日の朝9時ごろにホテルに戻りましたが、様子が騒然としていました。前夜の嵐が、甚大な人的被害を湾岸地帯に起こしたのです。これが、歴史に残るBhola Cycloneで、史上最悪の約50万人の死者が出たとわかるのは数日後でした。それから約2週間は世銀の緊急災害対策プロジェクトの草案作成チームの一員として作業に没頭しました。本部のクリスマスパーティーは中止になって、その経費は被災地復興に寄付されました。

世銀職員としての1年目には記憶に残る波乱万丈な体験をしました。その当時の世銀は若くて元気な人材が効率的に融資をする組織で、総裁も理想と信念に燃えていました。組織はまだ比較的コンパクトでスタッフの責任と行動力は旺盛でした。とにかく予算が潤沢で必要なときに好きなだけ現地に出張して成果があげられる仕組みでした。その反面、担当技官が優柔不断の場合は、サンパウロの環状道路プロジェクトのように、借り入れ国は

延々とデータ分析などの準備を強いられ、かえって世銀の関与のために必要なインフラ投資が大幅に遅れる場合もありました。さらに後年、世銀は環境問題、住宅移転問題、住民補償、汚職防止などなどの審査に膨大な調査費と時間を費やす巨大官僚組織に変貌してゆきます。これではより多くのインフラ投資を速やかに必要とする国々の資金需要を満たせません。世銀と同じように職員数の増加と組織の肥大化、融資案件審査期間の長大化はアジア開発銀行などの地域開発銀行でも起こっているかもしれません。

最後に一言。45年前の私の世銀1年生時代の経験から見ても世界の中進国のインフラ投資需要を満たす為には現在設立中のアジアインフラ投資銀行（AIIB）は、正解かつ必要な金融機関といえます。またAIIBの出資するインフラ投資案件にはメンバー国の企業以外は参加できません。日本のゼネコン、商社などの民間企業がこれから益々増えるアジアの巨大インフラ建設から締め出されないためにも日本は速やかにAIIBのメンバーになるのが得策のように思えます。